

Exclusive Interview

同窓生シリーズ
第82回54回生 百瀬晴海
HARUMI MOMOSE

日本大学芸術学部卒

2010年～2012年 11人の女性作家によるアーティストユニット
「イレブンガールズアートコレクション」で活動。

今輝いている木版画家



— ニューヨーク生まれということですが…

彫刻家の父が夢を抱いてニューヨークに渡り、私は8歳まで向こうで過ごしました。英語は少し聞き取れますが、ほとんど話せませんし、かろうじて単語を思い出せるのは中学高校での授業のおかげだと思います。

— どんな子供でしたか？

物心ついたときからクレヨン等で絵を描いていました。初対面の人とは今でも話すのが苦手ですが、絵を描くことを通じて人と関わるといふか、絵を描くことを人とのコミュニケーションの手段にしていたように思います。

最近では、絵画表現は自分にとって『杖』のようなものと例えています。生きていくための私の支えになっています。

— 新宿高校を受験した理由は？

父の影響で小さい頃から絵を描くことが大好きでした。将来は美大に進んで絵描きになりたいと思っていました。先生から薦められたことと、自宅から通いやすく画材店と予備校にも近いということで、新宿高校に決めました。

— 高校時代で印象に残っていることや頑張ったことを教えてください。

3年間美術部に所属し美術室に入り浸っていました。芸術科目ももちろん美術選択です。水彩画、油絵、鉛筆・木炭デッサンと美大受験のために一生懸命やっていました。父の母校である東京芸術大学を目指していましたが、残念ながら不合格。私が受験した時の実技試験では、『どう描くか』が重視されていたので技術だけでは受からないと思いました。

また、整備委員会に所属し、こちらの活動も一生懸命やりました。ゴミのチェック、分別の徹底という地味な仕事でしたが、意外と自分に向いていたと思います。社会に出てからは、一見華やかに見えることも、実は地道な作業の積み重ねに裏打ちされていると感じることが多く、整備委員会での経験が役に立ったように思います。

— 浪人時代はどうでしたか？

美大専門の予備校に通って絵を描いていました。学科の勉強は自分でしていました。朝から晩まで絵を描いていた一年でしたが、志を同じくする友人ができ、今でも親しく付き合っています。高校時代の友人とはまた違った絆を感じています。

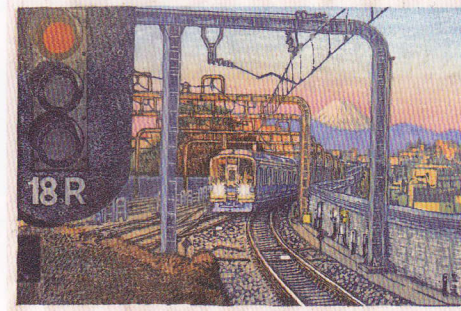
— 版画を始めたきっかけは？

1、2年では油絵を勉強し、3年で卒業制作に向けてコース分けがあり、版画を選択しました。技術を習得したかったのと、自分が今までやったことのない技法で描いてみたいという思いがありました。銅版か木版かで迷いましたが、木版を選びました。銅版は、プレス機等が必要なのと、使用する溶剤の匂いが苦手です。木版はバレンさえあれば印刷できますし、材料が木でんぶん糊、ニカワ、墨などで、体と環境に優しいかなと。

— 版画家になろうと思ったのはいつごろですか？

高校時代には、漠然と美術に関わる仕事をしたいと思っていました。教員免許も持っています。教育実習で新宿高校に行きました。今まで生徒として通った場所に、実習とはいえ教える立場で行くというのは、感慨深いものがありました。自分には教師は向いていないかもしれないと考えていましたが、実際にやってみて確信しました（笑）。生徒たちの方がしっかりしていて、逆に『先生、大丈夫？』と心配されたりもしました。就職活動も一応しましたが、面接官の方は私の履歴書を見て不思議そうな顔をし、私は自分の居場所がないように感じました。結局就職や画壇に入ることはせずにアルバイトをしながらグループ展に出品したりしていました。

版画家になろうと思ったのは大学卒業後です。とある画廊で『絵で食べていくノウハウ』を学ぶ機会を得たことがきっかけとなり今の仕事をするようになりました。学びたい、人と話をしたいという思いで動くうちに、仕事に繋がるようになりました。それは人とのめぐり合わせによるものだと感じています。



「鉄道ジャーナル」で、小田急電鉄の70駅をエッセイとともに毎号、版画で紹介されていると聞いています。

私は二〇一〇年に、切手の通信販売をしている会社の依頼で初日カバーの挿絵をアクリル画で描く仕事もしました。

初日カバーとは、新しく発行された郵便切手を貼り、発行当日の消印を押した封筒を指します。封筒といってもそれはちょうど台紙のような役目のもので、記念品としてコレクター向けに販売されます。封筒には切手の内容にちなんだ挿絵が印刷され、この絵のことをカシエといいます。私が描いていたのは日本の鉄道をテーマとした挿絵です。

この仕事はことのほか楽しく、描いているうちに、鉄道の絵を木版で作ってみたかどうかと考えるようになりました。そして、自分が長年利用していて親しみを感じている小田急線の駅をモチーフに木版画の制作をし、カレンダーにする企画書を作成するに至りました。これを小田急電鉄に提案しましたら、鉄道雑誌社に持ち込むことを勧められました。そこで鉄道ジャーナル社に企画書を送りましたところ、カレンダーではなく連載でどうかというお話をいただきました。

各駅や街の様子、季節感をどう出すか毎回考えながら、一駅一枚に2〜3週間ほどかけて作成しています。エッセイには、駅構内や周辺の商店街などを歩いてみた感想を書いています。スイーツのお店に入るなど、楽しんでやらせていただいています。電車は今までも同じに見えていましたが、今では、電車の顔も区別がつくようになりました。

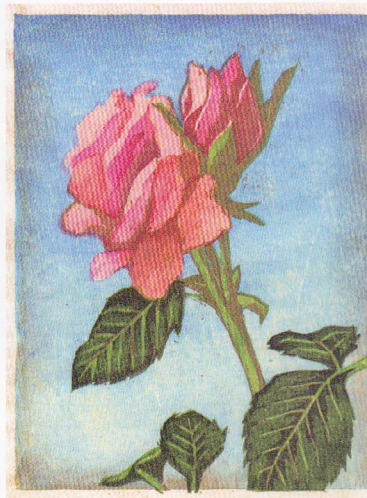
これから取り組もうとされていることは？

現在、連載中の小田急電鉄の駅シリーズが終了したら、ぜひ画集にまとめたいと考えています。またグループ展、個展といった展覧会にも積極的に参加していきます。機会があったら是非ご覧いただきたいです。

―新宿生に何かアドバイスがあったらお願いします。

高校を卒業して十年以上経ちますが、なかなか大人にならない部分があって、私の方が逆にアドバイス欲しいくらいです（笑）。

ひとつと言えるのは、高校の授業をしっかりと真面目に聞いていて損はないということでしょうか。一枚の絵を描くにも、数学の知識を使ったり、時代考証で歴史を調べたり、様々な



分野が関わってきます。

あの時勉強しておいて良かったなと今でも思います。きっと新宿生は、言われなくても授業に真剣に取り組んでいると思うので、その点は心配ないと思います。

今は、情報は早くから得られる分、私が高校生だった時よりも選択を迫られるのも早く、大変かもしれませんね。まずは、実際にやってみることで経験者から話を聞くことが大切ではないかと思っています。外から眺めた印象と実際とは異なることもあります。コツコツとした作業が好きなので、絵画修復家になることを考えた時期が私にもありました。でも、実際に修復の工房を見学してみて、それは自分に向いていないと気づきました。

新しいことや人と出たいという気持ち、私を今いる場所に連れてきてくれました。チャレンジの気持ちを大事にしてください。きっと自分の居場所は見つかると思います。

―本日はどうもありがとうございました。

華奢で可愛い方です。柔らかな雰囲気、「あがり症なんです」とはにかみながら色々お話をしてくださいました。

一方、作品は、力強いタッチで描かれ、動物や街の息遣いを生き生きと伝えています。機会があればぜひ、展示会に足を運んでみてください。

